

書評

荒木信子著『韓国の「反日歴史認識」はどのように生まれたか』

西岡 力（麗澤大学特任教授）

本書の副題は「終戦から朝鮮戦争までの南朝鮮・韓国紙から読みとく」だ。著者の荒木信子氏は、1945年8月15日から1950年6月25日までの5年間に発行されていた新聞22紙の広告欄を含む全紙面に目を通して、当時の韓国人の日本認識を整理した。日本の国会図書館に所蔵されている全紙の全ページを閲覧したというのだから、まずその膨大な作業に圧倒される。

なぜこの時期に絞ったのかについて、著者はこう説明している。（16頁）

《日韓の歴史問題が話題になるとき、日本統治時代の出来事あるいは現在持ち上がっている歴史認識問題の葛藤のどちらかに関心が集中している。また、反日といえば李承晩大統領が始めたことのように考えられがちである。

それに対し、本書はこれまであまり焦点の当てられなかった、終戦直後の一九四五年八月一五日から朝鮮戦争が勃発した一九五〇年六月二五日を対象とした。

日本の朝鮮統治が終焉したとはいえ、朝鮮半島ですぐに独立国家が樹立されたわけではなかった。紆余曲折を経て、大韓民国政府が樹立されたのは一九四八年八月一五日、朝鮮民主主義人民共和国政府は一九四八年九月九日である。対立を深めながら一九五〇年六月二五日に北朝鮮の南侵により朝鮮戦争が勃発する。混沌とするなか、新しい朝鮮半島の体制や国際関係が形作られていったこの時期、対日観、歴史認識、そして韓国がおかれた状況を知ることは意味があると考えた。》

この日本からの解放と国家建設を経て戦争勃発にいたる混沌とした時期の新聞の記事のなかで、著者は日本に関わる記事と当時の国内外状況に関する記事に注目した。本書ではその膨大な記事を4つのカテゴリーに整理して紹介、分析している。すなわち、第1章「反日言説の氾濫」で噴出した多数の日本批判、第2章「痕跡と葛藤」で日本統治が残した肯定的な側面、第3章「米国と中国の存在」第4章「共産主義者の存在」で朝鮮を取り巻く周辺国や勢力との関係を扱っている。

繰り返しになるが、566頁の大著を通読してまず、著者が行った作業量の大きさに圧倒された。よくこれだけ多くの判読しがたい韓国語の記事を読んだと感嘆する。そして、本書の特徴は、ただ韓国紙の記事を紹介分析しているだけでなく、その時代の日本人側の資料を読み込んで、韓国紙の日本批判に対して、日本側が認識していた真相はこうだったということも、かなりの分量を使って書き込んでいる点だ。

だから、読者は1945年8月から1950年6月までの南朝鮮・韓国に導かれ、そのとき韓国記者らが何を考え、どのような主張をしていたかを知り、それに対して著者である荒木信子さんがその時代に現れて、当時の日本人になりかわって、韓国紙の日本批判は実は

このような誤解、事実誤認があると反論する現場に立ち会うことになる。あたかも著者である荒木信子さんと一緒に時間旅行をしているかのような読後感を持つ。

その結果、日本ではもちろん、現代の韓国でもほとんど知られていないこの時期に、韓国人が日本に対してどのような考えを持っていたのかについて、細部にわたって知ることが出来、また、当時朝鮮に生きていた日本人側の視点からの反論にも接することが出来る。

たとえば、1945年11月以降に日本統治時代の朝鮮語有力新聞であった『東亜日報』『朝鮮日報』が復刊したが、両紙はすぐ日本を批判する連載を始めた。例えば、朝鮮日報は「日本の虐政三六年」という5回の連載を行った。著者はそれを詳細に紹介しつつ、反論をかなりの量を使って展開している。連載記事に見る「野蛮で卑劣な」日本人像、として著者が取り上げた5回の連載のタイトルは、以下のようなものである。

- 第一回 短見的な「力」の政治、朝鮮人は朝鮮人だった
- 第二回 奴隷教育に終始、朝鮮の精神を根こそぎ抹殺することを計画
- 第三回 全農地の八割蚕食、朝鮮農民の膏血を思いのまま搾取
- 第四回 利権ごとに独占壟断、朝鮮同胞は「労力搾取」の対象
- 第五回 民族的に侮蔑、ひどい差別待遇で終始一貫

著者は、それぞれの記事の一部を引用しながらその主張を要約し、日本統治終了直後に統治に対する否定的見方が噴出している様子を、韓国の反日の原点として紹介し、当時の日本側の資料などを根拠にして反論を加えている。

第三回目の記事の紹介では、記事紹介が3行、それに対する反論が21行ある。この記事は東洋拓殖株式会社の搾取を取り上げたものだが、記事の引用は全くせず、『東洋拓殖株式会社要覧』（1943年）を使って同社の概要について21行にわたり詳しく書き、最後の結論で「現地の農業開発、経済発展に資するところが大きかったと考えられるが、すべて『悪』とされる」と書いている。

評者である西岡はここを読んで、荒木さんが当時の日本人であれば皆持つはずの怒りを共感していることがよくわかり、その愛国心に感銘を受ける。だが、それと同時に韓国研究者としては、当時の韓国人が日本についてどのような認識を持っていたのか、そこにはどのような論理があり、構造があるのかという点をもっと知りたいと思ってしまう。

大変な作業をされて書かれた大作としかいいようがない本書は、通読することによって学ぶことは本当に多い。そのことを前提にした上で、歴史認識をテーマに研究をするのであれば、もう少し反論部分を少なくして、当時の韓国人の認識そのものへの取り組みを増やして欲しかった、と評者として言いたい。

(草思社、2023年)